

第6章 人間関係における絆の役割について

—夫婦間の絆の有無と離婚についての想起が主観的幸福感に及ぼす影響—

戸口 愛 泰

目 的

近年、日本でも3組に1組が離婚する時代といわれ、平成14年度まで右肩上がりでも推移した離婚件数はその年で約29万組に達し、離婚率（人口1000人あたりの離婚件数）も2.27と過去最高を提示した（厚生労働相，2007）。それ以降も毎年25万組以上が離婚をしており、単なる離婚ブームではないようである。10-60代の男女（7077名）を対象にしたWeb調査によると、離婚の選択肢について、「しない方が良いが仕方がない」と回答した人が75.1%（5307名）であり、「絶対してはいけない」と回答した人は僅か7.3%（516名）であった（インターワイヤード，2006）。この結果からも、離婚は消極的ながらも認められているのが現状といえよう。また同調査内における離婚について実際に考えたことがあるかの問いに対して、既婚男女4303名の内44.5%（1913名）が「よくある」「たまにある」と回答をした。インフォシーク（2004）によると、過去・現在において離婚を考えたことがある20-60代の結婚経験者（1852名）は、男性の29.4%（232名）、女性の43.1%（393名）であり、女性においてより顕著に離婚についての想起が行われているといえる。また、同様に40-50代の既婚男女（516名）を対象にした調査の場合、男性の32%、女性の42%が真剣に離婚を考えたことがあるようだ（MDRT日本会，2006）。これらの結果から、離婚について想起することは日常事であり、しかもその傾向には性差があることが伺える。では、これ程まで当たり前になった離婚について、人々はどう思っているのだろうか。小田切（2004）は離婚に対する否定的意識について取り上げた結果、男性の方が女性よりも離婚に対して否定的イメージが強く、同様に年配世代の方が若い世代よりも、子どもがいる者の方がいない者よりも否定的イメージが強いことを見出した。現代においても離婚についての否定的なイメージは残るが、だからといって想起をしない訳ではない。あるいは、若い世代や女性において抵抗が減ったので、全体として平均化したらより想起しやすくなったのかも知れない。

このように頻繁に想起される離婚ではあるが、実際の離婚には身体的かつ精神的ダメージが伴うとされる（加藤，2009）。夏目ら（1987）によると、離婚は配偶者の死に次いでストレス

強度（72点）が高いライフイベントである。さらに、離婚は孤独感を高め（Joung et al, 1997）、自尊心を低下させ（Marks & Lambert, 1998）、抑うつを程度を上昇させることも知見から見いだされている（Marks & Lambert, 1998）。これは、結婚から享受されていた恩恵（安らぎの場、情愛、社会的信用、子どもの養育など）が離婚により損失してしまうからだと考えられており、離婚が一般化しても消え去ることはない。

離婚が困難を伴うのは理解できるが、夫婦とはもともとが他人同士の関係である。その関係の解消は個々人の自由であり、親兄弟のような強い絆は持ちえないのではないだろうか。戸口（in press）は夫婦間の絆に関する調査を行った結果、夫婦間で絆の肯定的な側面を認識さえしていれば、夫婦関係の満足度が上昇することを、またその傾向は女性よりも男性にあることを検出した。同様に岡堂（1996）は、夫婦関係の崩壊の原因の一つとして夫婦間におけるインティマシーの不成立を取りあげた。インティマシーとは青年期におけるアイデンティティ確立をすませた成人に備わる心理的な強さであり、夫婦関係では「献身」することで相手との深いレベルでの親密な関わりと受容が約束される。つまり、犠牲を払うことができなければいつまでたっても夫婦関係のインティマシーは発達しないのである。絆もインティマシーも、夫婦間に備わることで心の健康を促進する働きを持ち、さらには関係崩壊に対する緩衝材（バッファ）としての役割も担うと考えられる。

上述の通り、大多数の既婚者が離婚についての想起を繰り返しているが、それ自体で何ら障害は発生しないのであろうか。そこで本研究では、現代において一般化された「離婚についての想起」が心の健康に何らかの負の影響を与えている可能性を模索すること、さらには夫婦関係のバッファ要因として「夫婦間の絆」を取り上げ、夫婦間の絆を認識することが心の健康に何らかの正の影響を与えている可能性を検討する。

方 法

調査協力者

調査会社のモニター登録者からランダムにサンプルした全国の既婚者600名（男性300名、女性300名）を対象にWeb調査を依頼した。調査協力者の平均年齢は43.22歳（ $SD = 10.65$ ）で、レンジは21–84歳であった。子どもを持つ協力者は476名（79.3%）で、最も多かったのが2人の子どもの持つ協力者247人（41.2%）であった。婚姻歴の平均は184.65ヶ月（約15年）で、レンジは0–625ヶ月（52年）となった。協力者の属性については、男性の176人（58.7%）が給与所得者であり、次いで自営業者44名（14.7%）、公務員31名（10.3%）の順番となった。女性の167名（55.7%）が専業主婦で、次いでパート・アルバイト77名（25.7%）、給与所得者の27名（9.0%）の順番となった。性別ごとの職業分布を χ^2 分析によって検討した結果、有意な偏

りが確認できた ($\chi^2(8) = 401.48, p < .001$)。このことから、本調査の協力者は性別によって職業分布に偏りがあることが分かった。男性は給与所得者に、女性は専業主婦にそれぞれ偏っていると考えられる。

質問項目

①絆の有無:「今現在誰かときずなで結ばれていると思うか」について、「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」の3件法で回答を求めた。

②絆の相手:絆で結ばれている相手を強い方から順に選んでもらった(選択肢:実母、実父、義母、義父、子ども、子どもの配偶者、孫・ひ孫、兄弟・姉妹、従兄弟、親戚、親友、友人、恋人、妻・夫、職場の同僚、地域社会、神様・仏様、ペット、その他)。

③離婚についての想起:「あなたは今までに離婚を考えたことがありますか」について、「よくある」、「たまにある」、「ほとんどない」、「まったくない」の4件法で回答を求めた。

④主観的幸福感尺度:心の健康を測定するため、島井らの日本版主観的幸福感尺度(2004)を参考に6項目を作成し、「あてはまる(5)」から「あてはまらない(1)」までの5件法で回答を求めた。

結 果

尺度の構造解明

主観的幸福感尺度の評定データに基づき因子分析(主因子法、Promax回転)を行った結果、「わたしは、他人に対して劣等感を持っている。」を除く5項目での1因子構造が確認された。信頼性分析の結果、十分な値が確認できた($\alpha = .83$)。各項目の回答分布図をTable 1に、因子負荷量をTable 2に記す。なお本調査では、この5項目の平均値を主観的幸福感尺度得点として用いるとする。

調査項目の基本的理解と性差の検討

まず、絆の有無についての調査項目における分布の偏りを検定すべく χ^2 検定を行った結果、有意な偏りが確認された($\chi^2(2) = 723.99, p < .001$)。内訳は、「絆あり」群(N=510)、「絆なし」群(N=27)、「どちらでもない群」(N=63)といった分布構成となり、絆がある人が他よりも有意に多いことが示された。しかし、絆がない、あるいはその存在についての判断を保留としている人が90名(全体の15%)も存在したことは特筆すべき結果といえる。なお、性差による分布傾向を確認するために、クロス表による分析を行った($\chi^2(2) = 20.50, p < .001$)。分析の結果から、女性の方が絆に肯定的なようである。Table 3にクロス表を記す。

Table 1 主観的幸福感尺度の回答分布表

			あてはま らない	ややあては まらない	どちらとも いえない	ややあては まる	あてはまる
全般的にみて、わたしは自分のことを幸福であると考えている。	%	100.0	5.7	23.3	48.3	20.2	0.0
	度数	600	34	140	290	121	0
わたしは、自分の同年輩の人と比べて、自分を幸福であると考えている。	%	100.0	8.7	37.5	36.7	14.7	0.0
	度数	600	52	225	220	88	0
わたしは、他人に対して劣等感を持っている。	%	100.0	26.7	36.2	20.8	5.5	0.0
	度数	600	160	217	125	33	0
わたしは、精神的に豊かでゆとりのある生活をしている。	%	100.0	15.2	35.8	34.5	9.8	0.0
	度数	600	91	215	207	59	0
わたしは、これまでの生き方に納得をしている。	%	100.0	15.8	30.8	37.2	12.0	0.0
	度数	600	95	185	223	72	0
わたしは、社会の役に立っていると思う。	%	100.0	12.0	49.3	27.0	6.5	0.0
	度数	600	72	296	162	39	0

Table 2 主観的幸福感尺度の因子負荷量

項 目	因子負荷量
全般的にみて、わたしは自分のことを幸福であると考えている。	.81
わたしは、自分の同年輩の人と比べて、自分を幸福であると考えている。	.79
わたしは、精神的に豊かでゆとりのある生活をしている。	.77
わたしは、これまでの生き方に納得をしている。	.72
わたしは、社会の役に立っていると思う。	.46
固有値	2.6
寄与率	52.07

Table 3 絆の有無と性別のクロス表

		絆の有無			合 計
		はい	いいえ	どちらでもない	
男性	度数	237	23	40	300
	性別の%	79.00%	7.70%	13.30%	100.00%
	絆の有無の%	46.50%	85.20%	63.50%	50.00%
女性	度数	273	4	23	300
	性別の%	91.00%	1.30%	7.70%	100.00%
	絆の有無の%	53.50%	14.80%	36.50%	50.00%
合計	度数	510	27	63	600
	性別の%	85.00%	4.50%	10.50%	100.00%
	絆の有無の%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

上記の「絆あり」群を対象に、絆の相手についての調査項目における分布の偏りを検討すべく χ^2 検定を行った。その結果、有意な偏りが確認された ($\chi^2(12) = 1935.22, p < .001$)。絆の相手として妻・夫が265名 (52.0%)、次いで子どもが150名 (29.4%) とその他よりも有意に多いことが示された。なお、性差による分布傾向を確認するために、クロス表による分析を行った ($\chi^2(12) = 30.58, p < .01$)。なお、セル数が多いことから、クロス表の内容は参考程度とする (Table 4 参照)。

離婚についての想起項目における分布の偏りを検討すべく、 χ^2 検定を行った結果、有意な偏りが確認された ($\chi^2(3) = 91.97, p < .001$)。内訳は、よくある (N = 51)、たまにある (N = 163)、ほとんどない (N = 201)、まったくない (N = 185) であり、よくあると答えた人の人数が圧倒的に少ないことから、協力者はあまり積極的に離婚を考えていないことが判明した (Figure 1 参照)。なお、性差による分布傾向を確認するために、クロス表による分析を行った ($\chi^2(2) = 13.70, p < .01$)。男性の方が、相対的ではあるが離婚に消極的であるようだ。Table 5 にクロス表を記す。

絆の相手と離婚の想起の検討

絆の相手の調査項目から、一番重要な絆の相手として夫・妻を選んだ人は265名 (52.0%) おり、既婚者におけるその重要性が確認された。そこで、夫・妻を選んだ人を「夫・妻」群 (N = 265)、それ以外の相手を選んだ人を「その他」群 (N = 245)、絆のない人を「絆なし」群 (N = 90) とし、以降の分析を行った。まず、それぞれの群ごとに離婚の想起における分布の偏りを検討すべく、 χ^2 検定を行った。その結果、全ての群において有意な偏りが確認された (「夫・妻」群: $\chi^2(3) = 103.20, p < .001$; 「その他」群: $\chi^2(3) = 20.65, p < .001$; 「絆なし」群: $\chi^2(3) = 11.60, p < .01$)。全体的に「よくある」と答えた人は少なく、離婚への消極的態度が現れている。さらに「夫・妻」群においては、それに加え、「ほとんどない」・「まったくない」において統計的に想定以上の人数が確認されており、やはり夫や妻との絆を最優先にした人は、離婚についてより消極的なのであろう。Table 6 にクロス表にした詳細を記す。

子どもの有無と絆の想起の検討

子どもの有無が離婚の想起に影響を与える可能性を検討すべく、 χ^2 分析を行った結果、「子どもあり」群 (N = 476) においても、「子どもなし」群 (N = 124) においても、その分布に有意な偏りが確認された (「子どもあり」群: $\chi^2(3) = 71.58, p < .001$; 「子どもなし」群: $\chi^2(3) = 36.71, p < .001$)。全般的に「よくある」と答えた人は少なく、さらに「子どもあり」群で

Table 4 絆の相手と性別のクロス表

		性別		合計
		男	女	
実母	度数	20	34	54
	絆の相手の%	37.00%	63.00%	100.00%
	性別の%	8.40%	12.50%	10.60%
実父	度数	1	1	2
	絆の相手の%	50.00%	50.00%	100.00%
	性別の%	0.40%	0.40%	0.40%
義母	度数	0	1	1
	絆の相手の%	0.00%	100.00%	100.00%
	性別の%	0.00%	0.40%	0.20%
子ども	度数	50	100	150
	絆の相手の%	33.30%	66.70%	100.00%
	性別の%	21.10%	36.60%	29.40%
子どもの配偶者	度数	3	4	7
	絆の相手の%	42.90%	57.10%	100.00%
	性別の%	1.30%	1.50%	1.40%
孫・ひ孫	度数	1	1	2
	絆の相手の%	0.00%	100.00%	100.00%
	性別の%	0.00%	0.40%	0.20%
兄弟・姉妹	度数	0	2	2
	絆の相手の%	0.00%	100.00%	100.00%
	性別の%	0.00%	0.70%	0.40%
友人	度数	1	0	1
	絆の相手の%	100.00%	0.00%	100.00%
	性別の%	0.40%	0.00%	0.20%
恋人	度数	5	2	7
	絆の相手の%	71.40%	28.60%	100.00%
	性別の%	2.10%	0.70%	1.40%
妻・夫	度数	149	116	265
	絆の相手の%	56.20%	43.80%	100.00%
	性別の%	62.90%	42.50%	52.00%
神様・仏様	度数	6	6	12
	絆の相手の%	50.00%	50.00%	100.00%
	性別の%	2.50%	2.20%	2.40%
ペット	度数	14	5	19
	絆の相手の%	20.00%	80.00%	100.00%
	性別の%	0.40%	1.50%	1.00%
その他	度数	1	2	3
	絆の相手の%	33.30%	66.70%	100.00%
	性別の%	0.40%	0.70%	0.60%
合計	度数	237	273	510
	絆の相手の%	46.50%	53.50%	100.00%
	性別の%	100.00%	100.00%	100.00%

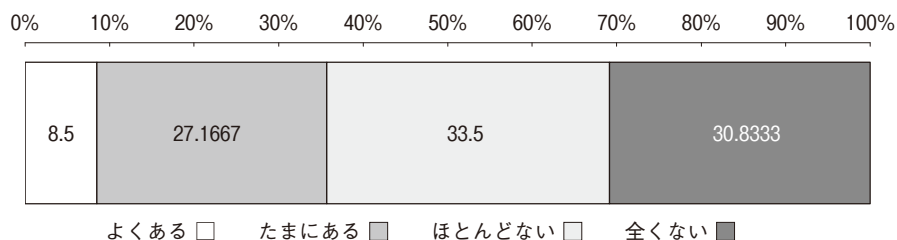


Figure 1 離婚の想起項目の回答分布図

Table 5 離婚の想起と性別のクロス表

		離婚の想起				合 計
		よくある	たまにある	ほとんどない	まったくない	
男性	度数	24	64	103	109	300
	性別の%	8.00%	21.30%	34.30%	36.30%	100.00%
	離婚の想起の%	47.10%	39.30%	51.20%	58.90%	50.00%
女性	度数	27	99	98	76	300
	性別の%	9.00%	33.00%	32.70%	25.30%	100.00%
	離婚の想起の%	52.90%	60.70%	48.80%	41.10%	50.00%
合計	度数	51	163	201	185	600
	性別の%	8.50%	27.20%	33.50%	30.80%	100.00%
	離婚の想起の%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

Table 6 離婚の想起と絆の相手のクロス表

		離婚の想起				合 計	χ^2 のp値
		よくある	たまにある	ほとんどない	まったくない		
夫婦	度数	5	52	100	108	265	$p < .001$
	絆の相手の%	1.90%	19.60%	37.70%	40.80%	100.00%	
	離婚の想起の%	9.80%	31.90%	49.80%	58.40%	44.20%	
その他	度数	33	81	70	61	245	$p < .001$
	絆の相手の%	13.50%	33.10%	28.60%	24.90%	100.00%	
	離婚の想起の%	64.70%	49.70%	34.80%	33.00%	40.80%	
絆なし	度数	13	30	31	16	90	$p < .01$
	絆の相手の%	14.40%	33.30%	34.40%	17.80%	100.00%	
	離婚の想起の%	25.50%	18.40%	15.40%	8.60%	15.00%	
合計	度数	51	163	201	185	600	
	絆の相手の%	8.50%	27.20%	33.50%	30.80%	100.00%	
	離婚の想起の%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	

は「ほとんどない」に、「子どもなし」群では「まったくない」に回答傾向が偏っており、子どもの有無によって明白に離婚傾向が異なることはなく、やはり全体的に離婚への消極的態度が確認された。Table 7 にクロス表にした詳細を記す。

Table 7 離婚の想起と子どもの有無のクロス表

		離婚の想起				合 計	χ^2 の p 値
		よくある	たまにある	ほとんどない	まったくない		
子どもあり	度数	45	127	172	132	476	$p < .001$
	子どもの有無しの%	9.50%	26.70%	36.10%	27.70%	100.00%	
	離婚の想起の%	88.20%	77.90%	85.60%	71.40%	79.30%	
子どもなし	度数	6	36	29	53	124	$p < .001$
	子どもの有無しの%	4.80%	29.00%	23.40%	42.70%	100.00%	
	離婚の想起の%	11.80%	22.10%	14.40%	28.60%	20.70%	
合計	度数	51	163	201	185	600	
	子どもの有無しの%	8.50%	27.20%	33.50%	30.80%	100.00%	
	離婚の想起の%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	

主観的幸福感の検討

主観的幸福感の性差を検討すべく、差の検討を行った結果、性差は確認できなかった ($t(598) = .00, n.s.$)。同様に職業別に差の検定を行った結果、有意差は確認できなかった ($F(8,599) = 1.53, n.s.$)。また、子どもの有無による差の検定も行ったが、有意差は確認できなかった ($t(598) = .27, n.s.$)。主観的幸福感とは、性差にも職業にも子どもの有無にも影響を受けないことが判明した。一概に安定した職に就いている、あるいは子どもが居るから幸せだとは言えないようである。さらに、時間的経過からの影響を検討するために、主観的幸福感と年齢 ($r = .03, n.s.$)、および婚姻歴 ($r = .03, n.s.$) との相関分析を行った結果、有意な相関は確認されなかった。つまり、主観的な幸せとは、加齢や婚姻年数の増加とは独立しており、時間軸での理解は困難であることが示された。一般的に長期的に結婚生活をおくる人や落ち着いた年配者の方が幸せと思われるが、結果からは証明されず、新しい知見といえよう。

次に、夫婦間の絆があると主観的幸福感が増加するのかを検証するために、夫婦間の絆の有無を独立変数に主観的幸福感を従属変数とする一要因の分散分析を行った。その結果、有意差が確認された ($F(2,599) = 25.22, p < .001$)。多重比較 (Tukey) の結果、「夫・妻」群と「その他」群間を除く全てにおいて有意差が確認された (「夫・妻」群 = 「その他」群 > 「絆なし」群)。平均値と標準偏差を Table 8 に記す。「夫・妻」群は主観的幸福感得点が有意に高く、夫婦間の絆があることで主観的ではあるが幸福に導かれることが示された (Figure 2 参照)。さらに、離婚についての想起が起ると主観的幸福感が減少するのかを検証するために、離婚の想起を独立変数に主観的幸福感を従属変数とする一要因の分散分析を行った。その結果、有意

Table 8 絆の相手の平均点と標準偏差

	N	M	SD
夫・妻	265	3.57	.64
その他	245	3.45	.76
絆なし	90	2.96	.77

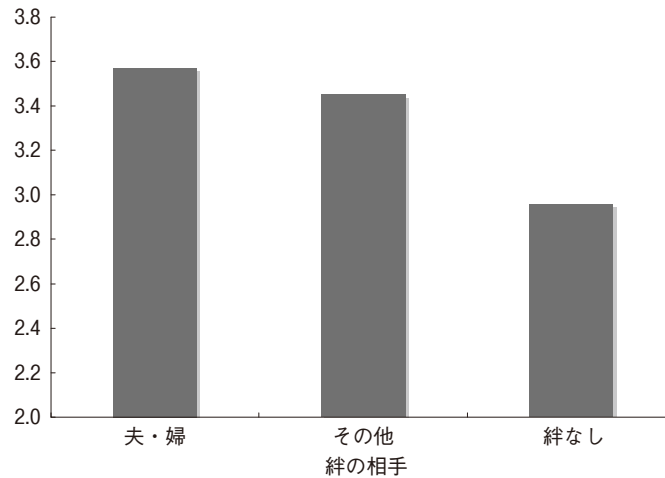


Figure 2 絆の相手の平均値のグラフ

差が確認された ($F(3,599) = 24.98, p < .001$)。多重比較 (Tukey) の結果、「ほとんどない」群と「まったくない」群間において有意傾向が、その他全てにおいては有意差が確認できた (「よくある」群 > 「たまにある」群 > 「ほとんどない」群 > 「まったくない」群)。平均値と標準偏差を Table 9 に記す。離婚についての想起がよくある群から順に主観的幸福感が高まるのがよく分かる (Figure 3 参照)。これらの結果から、誰かと絆を結ぶことと離婚を意識しないことが、主観的幸福感の向上に寄与することが理解できる。

では、それら 2 つの要因を同時投入し、どちらの方が主観的幸福感に影響を与えているのかをダミー変数を用いた数量化I類にて検討する。分析の結果、有意な回帰関係が確認された ($R^2 = .16, p < .001$)。アイテムレンジから離婚の想起 (レンジ = .756) の方が絆の相手 (レンジ = .474) よりも、相対的に主観的幸福感に対する貢献度が高いことが示された。また、カテゴリごとの理解から、絆があることがプラスの、離婚の想起があることがマイナスの影響を与えていることが分かる。つまり、やはり誰かと絆があり、離婚を考えない人は主観的幸福感が高くなると推定できる (Table 10 参照)。なお、絆の相手と離婚の想起における分布傾向を確認するために、クロス表による分析を行った。その結果、既述の分析結果が物語るように、分布に有意な偏りが確認できた ($\chi^2(6) = 53.89, p < .05$)。Table 11 にクロス表を記す。

Table 9 離婚の想起の平均点と標準偏差

	N	M	SD
よくある	51	2.84	.91
たまにある	163	3.23	.68
ほとんどない	201	3.51	.71
まったくない	185	3.68	.64

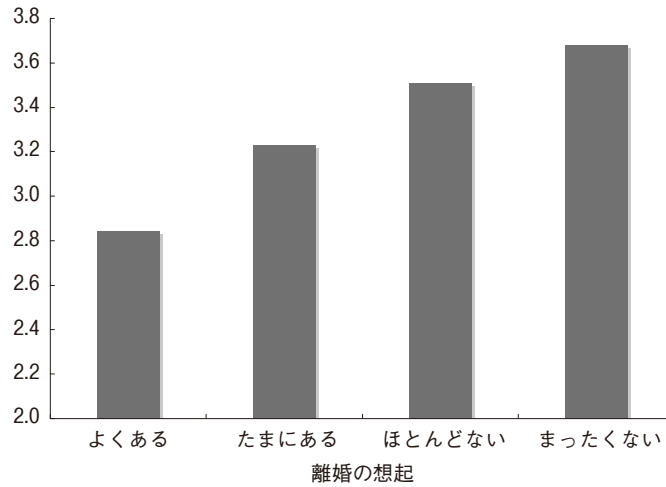


Figure 3 離婚の想起の平均値のグラフ

Table 10 数量化 I 類の結果 (従属変数: 主観的幸福感)

		離婚の想起		
絆の相手	1: 夫・妻	—	—	
	2: その他	—	—	
	3: 絆なし	-.474	-.228	***
離婚の想起	1: よくある	-.756	-.285	***
	2: たまにある	-.402	-.241	***
	3: ほとんどない	-.137	-.088	*
	4: 全くない	—	—	

*p<.05 ***p<.001

Table 11 絆の相手と離婚の想起のクロス表

絆の相手	夫・妻	度数	離婚の想起				合 計
			よくある	たまにある	ほとんどない	まったくない	
絆の相手	夫・妻	度数	5	52	100	108	265
		絆の相手の%	1.90%	19.60%	37.70%	40.80%	100.00%
		離婚の想起の%	9.80%	31.90%	49.80%	58.40%	44.20%
その他	度数	度数	33	81	70	61	245
		絆の相手の%	13.50%	33.10%	28.60%	24.90%	100.00%
		離婚の想起の%	64.70%	49.70%	34.80%	33.00%	40.80%
絆なし	度数	度数	13	30	31	16	90
		絆の相手の%	14.40%	33.30%	34.40%	17.80%	100.00%
		離婚の想起の%	25.50%	18.40%	15.40%	8.60%	15.00%
合 計	度数	度数	51	163	201	185	600
		絆の相手の%	8.50%	27.20%	33.50%	30.80%	100.00%
		離婚の想起の%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

考 察

本調査では、夫婦間の絆の有無と離婚についての想起が主観的幸福感に及ぼす影響について検討を行った。結果から、まず誰かと絆で結ばれていると認識する人が大多数おり、特に女性においてその傾向が顕著であった。身近な他者との絆を実感しているものと考えられる。また、絆の相手として、夫・妻が半数以上を占め、次に子どもの順となった。これは、既婚者を対象に調査を行ったからではあるが、元は他人でも最も重要な絆の対象と成りえる現状が映し出された。さらに、離婚については基本的にあまり考えていないようである。もちろん選択肢において最も票数の多かった「ほとんどない」(N=201)とは、決してない訳ではなく稀に考えるのだろうが、「たまにある」と答えるよりもその頻度は少ない。「ほとんどない」と答えた協力者は、そこに肯定的な意味を込めているものと解釈し、離婚に関しては全体的にあまり考えないものと理解する。その中でも、男性の方が比較的離婚に消極的のようである。さらに、絆の相手を夫・妻と選択した人においては、より離婚を選択する傾向になく、夫・妻との絆に対する重要度の高さが、そのまま関係継続への意思として現れたといえる。そして、最も注目すべきは、誰とも絆がない、あるいは離婚についての想起が多いと主観的幸福感が低下することが示され、絆の重要性のみならず、離婚を意識しないことの重大さも確認できたことである。もちろん、原因と結果の方向性を考える上で主観的幸福感の低さが離婚行動へとつながる可能性については疑問に残るが、離婚について繰り返し考えることと実際に離婚を踏み切ることとは異なるため、本研究では離婚について想いを巡らすことが、主観的幸福感の低下に寄与するものと考えられる。

本調査の結果でも、男性は比較的離婚を希望せず、妻（配偶者）を絆の対象と意識していた。女性の方が人との絆を意識することには長けているにも関わらず夫（配偶者）への絆意識が相対的に低いのは、女性はやはり夫（配偶者）に不満を抱く境遇に置かれているのであろうか。また、離婚について想起しないことが心の健康につながることから、想起しやすい女性の方が必然的に不健康となってしまうのだが、その点については、今後さらなる検討が必要といえる。

引用文献

- インフォシーク（2004）. 生活についてのアンケート, 楽天リサーチ,
 〈<http://research.rakuten.co.jp/report/20040427/>〉（2009年12月21日）.
- インターワイヤード（2006）. 離婚に関する意識調査, DIMSDRIVE,
 〈<http://www.dims.ne.jp/timelyresearch/2006/060725/index.html>〉（2009年12月21日）.
- Joung, I. M. A., Stronks, K., van de Mheen, H., van Poppel, F. W. A., van der Meer, J. B. W., & Mackenbach, J. P. (1997). The Contribution of Intermediary Factors to Marital Status Differences in Self-Reported Health, *Journal of Marriage and Family*, 59, 476-490.
- 加藤司（2009）. 離婚の心理学, ナカニシヤ出版.
- 厚生労働省（2007）. 平成16年人口動態公的月報年計.
- Marks, N. F., & Lambert, J. D. (1998). Marital Status Continuity and Change Among Young and Midlife Adults: Longitudinal Effects on Psychological Well-Being, *Journal of Family Issues*, 19, 652-686.
- MDRT日本会（2006）. 離婚に関する調査-2006年調査レポート, MDRT,
 〈<http://www.mdrj.jp/info/marriedcouple.php>〉（2009年12月21日）.
- 夏目誠・古我貴史・浅尾博一・杉本寛治・中村彰男・松原和幸・村田弘・白石純三・藤井久和（1987）. 勤労者におけるストレス評価法について（第1報）—自己評価に基づくストレス指数の作成—, 大阪府立研究所報, 25, 79-89.
- 小田切紀子（2004）. 離婚に対する否定的意識影響を与える要因—首都圏の一般成人を対象にして—, 家族心理学研究, 18（1）, 1-15.
- 岡堂哲雄（1996）. 離婚にみる親密さの崩壊, 現代のエスプリ, 353, 130-138.
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見陽（2004）. 日本版主観的幸福感尺度の信頼性と妥当性の検討, 日本公衛誌, 51（10）, 845-853.
- 戸口愛泰（in press）. 人間関係における絆の役割について—夫婦間の絆に着目して—, 関西大学経済・政治研究所「セミナー年報2009」・公開講座「第186回（平成21年9月30日）」.